

機関番号：32682

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720062

研究課題名 (和文) 寺院文化圏から見た延慶本『平家物語』の文化史的研究

研究課題名 (英文) On Buddhism culture in *Engyō-bon Heike monogatari*

研究代表者

牧野 淳司 (MAKINO ATSUSHI)

明治大学・文学部・准教授

研究者番号：10453961

研究成果の概要 (和文)：延慶本『平家物語』は、寺院文化と深い関わりを持つ。寺院文化の所産の一部が、訴訟文書と唱導資料である。訴訟文書と唱導資料は共に、人々を説得するための修辞法を駆使している。そしてこれらは声として発せられる、生きた言葉であった。また訴訟・唱導は、ともに儀礼的所作を伴う行為であった。延慶本は、これらの言葉・文化を吸収して生み出された。

研究成果の概要 (英文)： *Engyō-bon Heike monogatari* and Buddhism culture had a profound relationship. A part of the Buddhism culture is lawsuit documents and works of Buddhist preaching. Lawsuit fulfillers and Buddhist preachers made full use of rhetoric to persuade people. Their words were live words to be given as a voice. In addition, in the Medieval Japan, the lawsuit and the preaching were ritual acts both. *Engyō-bon* absorbed such words and culture.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：日本中世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：平家物語、寺院資料、唱導

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、共同研究会「延慶本注釈の会」に参加し、延慶本『平家物語』の注釈作業に取り組んできた（その成果は、延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈』巻一～四、汲古書院として刊行されつつある）。その研究活動の中で、延慶本の読解には、中世の寺院文化に関する知識が不可欠であると認識するようになった。そこで本研究では、寺院

に残された唱導資料（説経資料）や、訴訟文書に注目して、延慶本『平家物語』の文化的背景となった中世寺院文化の特質を明らかにすることを目指した。唱導資料については、研究開始前から注目していたが、あらたに訴訟文書を含めて、それらを、寺院における文筆活動の所産として見ていく必要性を感じていた。

2. 研究の目的

寺院に残された訴訟文書と唱導資料を調査することで、中世寺院における文筆活動の様態に迫る。寺院の訴訟文書や唱導資料には未紹介のものが多くある。それらの調査・発掘を行うことで、寺院の文化活動の一端を具体的に明らかにする。また、それら資料の文章構成上の特徴や、修辞法を明らかにする。その上で、寺院における学問のあり方や、僧侶に必要とされた学才について考察する。このような作業を通して、延慶本『平家物語』と寺院文化との関わりについて具体的に明らかにする。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、(1) 寺院資料(訴訟文書・唱導資料)の調査と、(2) 延慶本『平家物語』の文化史的、注釈的研究を並行して行う。

(1) 訴訟文書として、鎌倉時代後期に起こった諡号相論(延暦寺と東寺との間で、「本覚大師」の諡号勅与をめぐる争われた訴訟)と、本末相論(東大寺と醍醐寺との間で本寺末寺関係をめぐって争われた訴訟)に関係する文書を調査・研究する。唱導資料として、国立歴史民俗博物館蔵『転法輪鈔』(天台宗の澄憲を祖とする安居院流唱導の基幹資料の一つ)と、関連する安居院流唱導資料について、調査・解説を進める。

(2) 延慶本『平家物語』のうち、熊野関係章段・高野山(弘法大師)関係章段などについて注釈作業を進め、寺院文化との関わりを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 東大寺と醍醐寺との間で争われた本末相論に関する資料のうち、名古屋大須真福寺文庫に所蔵される分の影印と翻刻を、『東大寺本末相論史料』(真福寺善本叢刊のうちの1冊、臨川書店)として出版した。史料中の人名・神仏名、地名・寺社名、書名・経典名、文書名・史料名について、索引も作成した。これにより、鎌倉時代後期に起こった本末相論が、どのような人物の間で、いかなる論点をめぐって争われたのか、また、どのような文書・書物が訴訟で用いられているか、さらに、訴訟文書がどのように作文されているかを示すことができた。訴訟文書の紹介と索引を活用することで、鎌倉時代における寺院で訴訟が遂行される際の論理と手続きを、文化的に考察していくことが可能になった。また、東大寺側に立ってこの訴訟を推進したの

が頼心という僧侶であることが判明した。その活動の実態を追うことで、寺院における僧侶の活動と、それが生み出す文化について詳細を知ることができるだろうとの見通しを得ることができた。

(2) 東京大学資料編纂所に所蔵される諡号相論関係の資料調査を行った。資料紹介や論文で発表すべきものは見出していないが、関連する文書類の蓄積のされ方について、知識を広めることができた。これを通して、今後、調査を継続して行う場合の合理的な方法について、アイデアを得ることができた。

(3) 唱導資料として、国立歴史民俗博物館蔵『転法輪鈔』の解説作業と解題的研究を行った。同じ対象に取り組む研究者と研究会を組織し、定期的に解説を進めた。2010年度中に成果を公にする予定で取り組んできたが、資料として多角的な分析が必要であることが分かり、成果発表は遅れている。しかし、2011年度中には共同研究の成果として発表できる予定である。解説・読解作業に取り組む中で、多くの関連資料が見つかり、あらためて唱導資料の価値が大きいことを認識することができた。その一端については、論文「安居院流唱導書の形成とその意義」にまとめた。

(4) 延慶本『平家物語』の弘法大師関係章段について分析を行った。弘法大師の宗論説話(弘法大師が諸宗の碩徳と対決問答し、即身成仏の奇瑞を現じてみせることにより、諸宗を帰伏させたという説話)が、鎌倉時代後期の寺院間における相論(訴訟)と関わる中で生み出されてきたものであることを明らかにした。すなわち、宗論説話の原型は平安時代中期から作成され始めた弘法大師伝類から見えるが、それらは即身成仏の奇瑞を言うことに主眼があった。それに対し、延慶本の説話は諸宗との対決に重点が移っていること、それは寺院間対立と連動していることを示した。論文「延慶本『平家物語』弘法大師宗論説話の生成」として発表した。

(5) 延慶本『平家物語』の維盛関係章段について分析を行った。物語で維盛は、戦場である屋島を離脱し、高野山・熊野を巡礼して那智沖で入水したと描かれる。そこには、高野山や熊野の縁起や地形描写などが詳しく描かれている。このような聖地を物語中に描き出す際に参照されたであろう資料や、それらを用いて聖地巡礼場面を創り上げた手法について、注釈を付す形で分析した。成果はいずれ延慶本注釈の会編の『延慶本平家物語全注釈』の一部として発表される予定である。

(6) 延慶本『平家物語』と寺院文化との関わりを考える中で、仏教と延慶本『平家物語』との関わりに関する研究動向をまとめ、今後の見通しを述べた。研究動向「仏教と延慶本平家物語」としてまとめた。

(7) 寺院における文筆活動について研究を進める中で、寺院で作成された資料が儀礼と密接な関わりを持つことをあらためて認識するに至った。『平家物語』は、寺院における仏事儀礼とそれに伴う芸能文化の影響を強く受けているとの見通しを得ることができた。これにより、今後、延慶本『平家物語』を読解していくための、重要な視座を獲得することができた。『平家物語』が寺院の芸能を物語の方法として採用していること、特に後白河院と関係する章段にそれがよく表れていることについて、論文「後白河法皇の王権と平家物語」にまとめて発表した。

(8) 唱導資料の調査を進める中で、あらためて、その資料的価値(文学的・思想的・史料学的・文化史的意義)が高いことを認識するに至った。未紹介の資料も含めて、今後、唱導資料の価値と意義の探究を進めるべく、研究体制を強固なものにする必要性を感じた。そのために研究会や資料整理環境を充実させる準備を着実に進めることができた。

(9) 寺院における訴訟文書・唱導資料は、中世文学研究にとって有益であるのみならず、日本史学・日本思想史・日本美術史の分野にとっても多大な意義のあることが、研究会や学会の場での報告を通してますます明らかになった。今後、本研究で公にした寺院資料は多分野で研究・利用されると予測している。これにより日本の中世文化の主要な一翼を担った寺院文化圏の様態が、より具体的に描き出されることになると思われる。それは、人間文化の多様なあり方と可能性を示すことに繋がっていくと考えられる。

(10) 延慶本『平家物語』と寺院文化圏との関わりを示す論文を数本公表したことで、『平家物語』が仏教文化をふんだんに吸収して創り上げられていることをより具体的かつ詳細に示すことができた。このような考察を継続することにより、これまであまり注目されてこなかった『平家物語』の新たな一面—中世における寺院文化を物語の方法そのものとしている点—をより鮮明に浮かび上がらせていくことができるであろうと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

①牧野淳司、平家物語の「仏法」、明治大学古代学研究所紀要、査読無、14号、2010、57-69

②牧野淳司、テーマセッション記録「教育資源としての〈宗教文化〉—中世文学の立場から」、宗教と社会、査読無、16号、2010、265-268

③牧野淳司、真福寺所蔵聖教断簡について—改偏教主決の発掘—、GCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第4回国際研究会報告書「日本における宗教テキストの諸位相と統辞法」(名古屋大学大学院文学研究科)、査読無、2008、346-351

④牧野淳司、延慶本『平家物語』弘法大師宗論説話の生成、国語と国文学、査読無、85巻11号、2008、78-88

⑤牧野淳司、『平家物語』維盛身投げ物語の位置、日本文学、査読有、661号、2008、37-44

〔学会発表〕(計7件)

①牧野淳司、『平家物語』の国際意識、第1回高麗大学校・明治大学国際学術大会「韓・日文化交流の諸相」、2011年3月30日、韓国・高麗大学校

②牧野淳司、鎌倉時代後期の寺院社会とその文化的環境、中世文学学会、2010年5月29日、法政大学

③牧野淳司、教育資源としての〈宗教文化〉—中世文学の立場から、宗教と社会学会、2009年6月7日、創価大学

〔図書〕(計8件)

①石川日出男・日向一雅・吉村武彦編、「交響する古代」、東京堂出版、2011、所収「後白河法皇の王権と平家物語」を執筆、372-391

②阿部泰郎編、竹林舎、中世文学と寺院資料・聖教、2010、論文「安居院流唱導書の形成とその意義」を執筆、216-236

③栃木孝惟・松尾葦江編、汲古書院、延慶本平家物語の世界、2009、研究動向「仏教と延慶本平家物語」を執筆、121-135

④延慶本注釈の会編、汲古書院、延慶本平家物語全注釈 第二中(巻四)、2009、736

⑤阿部泰郎・川崎剛志・小峯和明・福島金治・牧野淳司著、臨川書店、中世唱導資料集二(真福寺善本叢刊 第四巻 第二期 全十二巻)、2008、「『安極玉泉集 断簡』翻刻と解題」を執筆、353-374

⑥稲葉伸道・牧野淳司著、臨川書店、東大寺本末相論史料(真福寺善本叢刊 第十巻 第二期 全十二巻)、2008、774

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 淳司 (MAKINO ATSUSHI)
明治大学・文学部・准教授
研究者番号：10453961